この人に聞く　田口 孝（たか） さん

つまんないことなんて
している暇はない

【略歴】
・元養護教諭
・中学校２校、小学校５校、特別支援学校１校勤務。
・日本赤十字社救急法指導員 40 年。
・メンタルヘルスマネジメントⅡ種。
・不登校親の会コーヒーブレイクの会世話人
・趣味はヴァイオリン、二胡。

編　集　部

気が付いたら養護教諭になっていた？

実は養護教諭になろうと思ってなったのではなく、気が付いたら、なっていたという感じです。

私は、子どものころから「中学校の社会科の先生になって勉強を教えている私」というイメージをずっと持っていました。しかし、結局進路に失敗し、行くところがなくなってどうしようかと思っていた時に、「学校の先生になるなら、保健室の先生もあるよ」と親から教えられました。そこは、学費もそんなにかからないところだったので、とりあえずそこを受験したら受かったので入ることにしました。

養護教諭になる気は全くありませんでした。「私はこんな道を行くはずではなかった。こんなところにいて私は情けない奴だ」という気持ちで学生生活を送っていました。仕事に就いた時も、自分ではない感じがしていました。

でも、いざ子どもの前に立つと、仕事はたくさんあるし、やってみると難しいこともいろいろありました。続けて行くうちに、子どもや学校が抱える問題がだんだん見えてきて、それを解決しないと前に進めないこ

とがたくさんありました。中学生はとてもかわいく、保健室を頼りにしてやってくる子もいました。

子どもの成長を見るのは楽しかったです。次第に保健の先生は、学力云々ではなく、その子の身体や心、生活、その後ろにある親子の関係など子どもを丸ごと見ていけるいい仕事だなと思うようになってきました。

養護教諭は保健室を通して、子どもの成長を支えられることができる、いい仕事だと今は思っています。

保健指導で学校づくり

教員生活の最初の頃は、学校が荒れ、校内暴力とか喫煙問題とかがあった時代でした。

保健室には教室に入れない生徒たちがやってきて、長時間過ごし、仕事ができない日が多くなっていきました。「保健室が甘やかすからだ」という職員からの批難も受けましたが、彼らはどこにも居場所がなかったのだと思います。心配していた異性間の問題も当然のように出てきました。

荒れ始めると、子どもたちは喫煙を始めます。休み時間が終わるとタバコの吸い殻がトイレに落ちていて、拾い集める日が続きました。私は、養護教諭としてできることは「未成年だからダメ」はなくタバコの害を科学的に教えることではないだろうかと思い、保健指導の必要性を教務室で伝え、全国養護教員サークル協議会や実践集を参考にして指導案を作成。たばこの煙のために肺が汚れていくようす一目でわかる装置やミミズの実験など子どもたちは引き込まれるように見ていました。タバコ常習の彼らが一番真剣な表情で、実験の補佐役もしてくれました。

しかし、当時は子どもの荒れを学校が力で押さえつけようとする考え方が強く、結局、対教師暴力になり大騒動に発展していきました。

彼らが卒業した翌年は不思議と静かな落ち着いた学校に戻り、私はこの学校が落ち着いている間に命と性を教えようと思いました。

荒れていても荒れていなくても「自分は何者なのか？自分の体はどう変化していくのか？異性はどうなのか？人を好きになるってどういうことなのか？エッチなこと考える自分はダメな自分なの？」思春期真っ只中の中学生が必ずぶつかる問題です。少し落ち着いた今だからこそ、きちんと教えようと思いました。はじめに子どもたちの性に関する意識の実態調査をしました。

調査結果は丁寧に分析して、保健だよりでずっと連載しました。保健だよりを保護者が見る。教師が見る。子どもが見る。回数を重ねていくうちにやがて「性教育は必要」という合意が作られていきました。

校内では性教育推進委員会を作り、指導内容を検討しました。今でこそ性教育はスタンダードになりつつありますが、35年以上前のことですから性教育なんてみんな初めてです。「私は養護教諭で、よくわかってますので、私がやりますから」などと一人で先走ってしまったら失敗です。準備と合意形成には時間をかけて職場の先生方と一歩ずつ進め、翌年秋にようやくスタートにこぎつけました。「性教育」という窓口を通して子どもたちのことをたくさん話し合うことができ、学校づくりをしていくみたいな感じでした。

性教育は1年間に各学年3時間、担任が授業をするのですが、当初は、年配の先生が「俺は人に言えないようなこといっぱいしてきたのに、こんな性のことなんか言えないよ」とか、若い先生は「僕自身だってわかんないのに、子どもの前で話せません。明日は僕、年休とるから！」と正直な気持ちを話しに来る人もいました。「そういった気持ちを子どもに話していけばいいのでは？」と話し合いました。

校長先生は中学生の性の問題には危機感を持っていました。また、教師は新しいことに挑戦して、一生懸命に自分自身を語るのは大切なことで、そういう先生が生徒は好きなんだよと話していました。遠くから見守るような感じで実践を支えてくれました。学校がすごく柔らかい雰囲気に包まれるようになりました。

3～4年くらい経過すると、おのずと性交避妊を教えるかどうかというところに行きつきます。中学生に教えるのか教えないのか。教えるならば避妊具の使い方や性交を中学生にどう教えるのか。自分たちができるのか。「これも結論を急がずに一年間の準備期間を作り、話し合いを重ね、出た結論は実施。保護者に学習公開するというものになりました。

学校が荒れたとき、よく一枚岩になって子どもに対応しなければいけないということを生徒指導やこわもての教師が言っていた時代があります。私も子どもたちにきつく当たったりしたこともありました。

しかし、あの時、もっと彼らの側に立って彼らの話をよく聞いて、もっと彼らの味方をしてあげればよかったなとすごく悔やまれます。保健室が砦になってあげ

られなかった。ですから、今度子どもたちが困っていたら、しっかりと子どもの側に立とう。どうにもならないほどつらくて保健室に来ているんだ、丁寧に話を聴こうと思いました。学校が荒れた時とその後の性教育の学校ぐるみの取り組みは大変だったけれども、私の原点のような気がします。

体と命を見つめる

健康の問題で、全国養護教諭サークル協議会（全養サ）の全国集会や東北ブロック集会で子どもの実態からスタートするということと、体の不思議に注目させ自分の体から健康を学ぶということをすごく勉強させてもらいました。

人間の体は巧みにできています。自分の体をよく見ると、その不思議さに気づき体が愛おしく思えるようになってきます。たとえば、子どもがケガをして保健室へ来たときは指導のチャンスです。

「ケガして痛かったけどきれいに治るよ。どんなふうに傷が治っていくのかよく見てね。ぶつけたところが今青いけど、それが段々色が変わって茶色になって黄色になってもとの皮膚の色になるよ。不思議だね」。

「この間のけがのところが赤いの？どれどれ？あ、周りが赤くて心配なのね。

傷を治して、新しい皮膚を作って……栄養がたくさん必要なのよ。そう治る材料ね。このケガ治せってー体中の治る力が集まってくるの。栄養を運ぶために毛細血管っていう細い血管がたくさんできるのよ。だから赤くなっているの。傷の修理が終わったらその毛細血管はなくなって、赤いのもなくから、見ていてね」などと話しました。

歯科指導では、奥歯と前歯のスケッチをさせました。子どもの虫歯は六歳臼歯に集中しています。ですから奥歯はどうなっているのか鏡で観察して、それを絵にスケッチする。前歯と比較すると、ギザギザがあることや溝が深いこと、想像以上に奥まったところに生えていること認識されます。子どもたちはなぜ歯を磨くのか、何を注意すればいいのかすっきり理解できました。

目玉を鏡で見て目玉のスケッチをする。その目の仕組みは、こんなに巧みです。ということを、授業で教える。このように自分の体を通して、生命の尊さを学んでもらうようにしました。自分も友達の体も巧みで

稀有な存在で、「俺ってすごいじゃん！」と肯定感をもって生きていってほしいと思いました。

町全体で健康と生活を取り戻す

出雲崎に勤めていた時、子どもたちがメディア、特にゲームばかりしていると街全体がすごく心配した時期がありました。じいちゃんやばあちゃんたちも、「孫がゲームばかりして何度言ってもダメだ。どうなっているんだか……」と話す。学校で、生活リズム見直し週間を設定して「ゲームの時間は〇時間まで」と指導し生活点検をしても、その週間が終わるとまた元に戻ります。今でもメディアコントロールに取り組んでいる学校が多いですが、なかなか効果が出てこないのではないでしょうか。

この問題は、家庭と子どもだけに責任を押し付けてもどうにもならず、もっと広い視野が必要です。ＰＴＡ、地域の育成委員、商工会の人、学校医、教育委員会、保健師、役場の人となどと合同の会議を開き、どうしたら町全体の子どもの生活リズムがよくなるのか、それぞれ何をすればよいのかを話し合いました。標語を作りましょうという提案をして、標語を親子から募集しました。町全体の標語に選ばれたのが、『ノーメディア、減らした分だけ家族の時間』という標語でした。メディアをコントロールして、家族が関係性を深めようという視点が、みんなに共有されたのです。町は、のぼり旗や大きいポスターを作成し掲示しました。

『0のつく日はノーメディアの日』になりました。10日20日30日はノーメディアにするなどメディアの使い方を考える日です。最初のノーメディアの日は、なぜ町がこの取り組みをするのかを町の防災無線で全町内に、説明を流してくれました。

町は環境つくりもしました。ノーメディアディは、小学生のために町の体育館でレクリエーション担当の指導員を配置し、家族みんなで体を動かそうという企画を、中学生のためには、大学生を雇い学習の場を開きました。先日、出雲崎町に行ったら、それはまだ続いており、町の施策になれば継続していくのだと思います。

地域保護者の関心が高まり、学校での指導は効果を上げていきました。ゲームの時間を云々するより、ノーメディアの日にどんなことをして過ごしたのかに注目できるように指導をしていきました。

町全体が子どもを大切にして、生活リズムを支えてくれて、初めて子どもが健康に成長できるのだということを教えてもらいました。

コーヒーブレイクの取り組み

不登校の親の会コーヒーブレイクは、１９９４年に始まって、２０２１年に一旦終了になっています。新潟のアーベルの会をお手本にしながら、月1回の例会をしていました。

始めるきっかけは、学力観の問題について講演会に取り組んでいるときに、子どもの不登校に悩んで、体調を崩してしまっているお母さんがあちこちにいることに気づいたことです。講演会の後、お母さんたちに、ちょっと一息ついて、お茶でも飲んでゆっくり話をしていただこうと声をかけたのがコーヒーブレイクの会の始まりです。

例会にお母さんお父さん、おばあちゃんもおいでになっていました。「ここだったらゆっくりと話ができるし聞いてもらえる」「子どもの不登校はうちだけではなかった。安心した」先輩母さんの話を聞いて、「そうかあ。自分の子もそうなるのかな」と希望が持てた」「子どもに付き合っていこう。動きだすのを信じて待とう」「コーヒーブレイクに行った日は子どもを温かく見てあげられる」こんな声が届きました。

教育講演会や映写会も時々行いました。「コーヒーブレイクの会でお母さんたちは元気になっていくけど、子どもにも出かけていく場所が欲しい」と要望があり、２０００年から12年間、夜、子どもたちが集まって、そこに大学生が来て一緒に遊ぶっていうフリースペース・スマイルを続けました。

少子化で子どもの数は減っているのに不登校は増加の一途をたどっていて、２０２１年度は前年度より４万８０００人増で24万５０００人過去最多になりました。新潟県では長期欠席者が３８５４人。前年より７４２人増え過去最高になりました。子どもと親の悲鳴が聞こえてきます。コーヒーブレイクの会は、今休止したままになっているのですが、休んでいていいのか自問自答をしています。

平和を語り継ぐ

退職が近づいてきた頃、私は教職を離れても一市民として平和のことを長く無理なく続けていく方法を探

していました。偶然市政だよりに、長岡空襲紙芝居講座の案内を見つけ、人前で紙芝居や朗読するのが好きな私は、「これだ。自分にぴったりだ」と思いすぐに申し込みました。

長岡市は太平洋戦争末期に県内で唯一空襲を受けました。私の祖母は空襲を体験しており私が小さなころ「布団をかぶって土手に逃げた。布団にぶすぶす火が付いて…」とよく話してくれました。父は予科練で終戦を迎えたのですが、「長岡に帰ってきたときは、駅から長生橋が見えた。家に向かって歩いているとまだ地面が熱かった」と私はよく聞かされていました。

長岡市には市の戦災資料館があり、戦災の事実と平和の大切さを後世に伝える活動拠点になっています。紙芝居講座はこの資料館内で4回行われました。空襲の理解する、体験者の語りをきく、紙芝居の演じ方、発音練習などレクチャーを受けました。現在紙芝居ボランティアは数名いて講演依頼があると学校などに行き演じます。私も1年間に2～3回演じています。

動画に慣れ親しんでいる子どもたちには、紙芝居がすごく新鮮です。絵も話も胸に迫ってきて、泣きだしそうな顔で、紙芝居を見ています。終了後、「怖かった」「戦争なんか絶対駄目だと思います」「あのお母さんはかわいそうだ」など感想が出ます。

市内に柿川という小さな川があり、空襲時に多くの人が柿川に逃げ込み亡くなりました。先日、紙芝居に行った学校は、近くの柿川は頻繁に遊びに行っている川でした。紙芝居を見た後、「自分たちが遊んでいる川で、そんなに人が死んだなんて、びっくりした」と言っていました。

私は「長岡空襲を伝えていくんだよと」祖母や父からバトンタッチされたと考えています。紙芝居や戦災資料館のボランティアを続けていく使命のようなものを感じています。

つまんないことなんてしている暇はない

私は、65歳になったばっかり。まだたくさんのことをやれそうです。人間が生きていられるのはおおよそ100年位でしょうか。宇宙の138億年の歴史から見れば、人間の100年なんて、星がぴかっと光って消えるよりも短い。まばたきよりも短い。私は、100年間宇宙に観光旅行に来てるんだと思っています。

例えば飛行機に乗ってどこかへ観光旅行に行ったら、

楽しくて楽しくて、次はどこを見ようかなとか、あのお店に行ってこようとか目一杯遊びます。つまらないことなんてしているのは、もったいないと過ごしませんか？

命をもらって宇宙旅行中の私。たった100年しか生きられないと思ったら、つまんないことなんてしている暇はありません。

インタビューを終えて

田口さんとは、忙しい夕方の5時から1時間ほど、Zoomでのインタビューでした。

この日は午後、長岡9条の会の講演会で憲法前文の朗読をされ、帰宅後、孫の入浴を済ませてからの時間でした。

先日には、練習を重ねた友人たちとの、弦楽四重奏の演奏会を終えたばかりとのこと。日本赤十字や戦災資料館の活動をはじめとして、いろいろなボランティア活動に取り組み、毎日2～3の活動があるとのこと。

お話しを聞いて、とてもパワフルで活動を続けている原動力を知ることができました。こちらも元気をもらえた充実した時間でした。

（聞き手　編集部・文責　和澄利男）